平成２４年度

出雲市大社地域の
活性化を目指す

「子ども・若者公民館活動」

「子ども・若者公民館活動」実行委員会

も　く　じ

１　「子ども・若者公民館活動」について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

（１）趣旨

（２）新しい公共型学校とは

（３）学校と地域の総合的活性化の目指すところ

（４）事業主体

（５）実行委員会の構成

（６）事業計画

２　子ども・若者公民館の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

（１）大社中学校若者公民館の実践

（２）大社小学校子ども公民館の実践

（３）荒木小学校子ども公民館の実践

（４）遙堪小学校子ども公民館の実践

（５）鵜鷺小学校子ども公民館の実践

（６）日御碕小学校子ども公民館の実践

３　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28

１.「子ども・若者公民館活動」について

（１）趣旨

出雲市大社地域は、観光地として、また、西日本有数の門前町として、毎年多くの観光客・参拝者が訪れ、活況を呈していたが、近年、観光客のニーズも多様化するなどから減少し、門前町もかつての賑わいが見られなくなってきた。

市でも門前町の再興を期し、道路整備や神門通りへの物販店等の誘致を進めてきたが、昭和の時代を知る者からすると、寂しい限りであった。

大社地域は、他の地域にはない観光スポットを数多く有し、その中心的位置にある出雲大社では、平成２５年５月に、６０年に一度の大遷宮が行われることから、大社町民をはじめ、県内外の関心も今後さらに高まっていくことと考えられる。

また、学校では、ふるさと教育をとおして地域の歴史や文化、豊かな自然について知るとともに、身近にいる素晴らしい人についても学習してきている。

こうしたことを踏まえ、文部科学省の「社会教育における地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究(学校と地域の総合的活性化)の委託事業を受け、大社地域の学校（５小学校、１中学校）で研究に取り組むこととした。

それぞれの学校内に「子ども（児童）・若者（生徒）公民館」を設置し、地域の社会教育施設（各地区コミュニティセンター）や地元企業、ＮＰＯ等地域住民と連携・協力し、児童生徒が主体的に地域に働きかける（地域を結びつける）取組や旅行先で大社地域をＰＲするような取組を行っていくことにより、大社地域の賑わいを取り戻すなど、学校と地域を総合的に活性化させる「新しい公共型学校」のモデルづくりを提案しようとするものである。

（２）新しい公共型学校とは

新しい公共型学校とは、次の３つを備えた学校のことである。

①地域をパートナーとする学校運営を行う学校 ②地域の幅広いネットワークによる学校支援がある学校 ③学校を拠点とした地域づくりを行う学校

地域をパートナーとする学校運営を行う学校については、平成１８年度から地域学校運営理事会を設置し、家庭・地域・学校の連携・協働が一層推進され、地域に根ざした特色ある教育活動や、学校が抱える諸課題の解決に向け協働して取り組むなど成果も確実にあがっている。

地域の幅広いネットワークによる学校支援がある学校については、平成20年度から、国の委託事業として始まった「学校支援地域本部事業」を導入し、地域の「ひと・もの・こと」を活かした教育活動を支援する体制整備に努めてきた。県も市も、地域への愛着と誇りを育む教育「ふるさと教育」を推進

している事とも相まって、「人材バンク」も整備され、各教科の授業やクラブ活動へのゲストティーチャーを始め、読み聞かせ、登下校時の見守りなど、多くのボランティアが、教育活動支援に係わっている状況が生まれている。

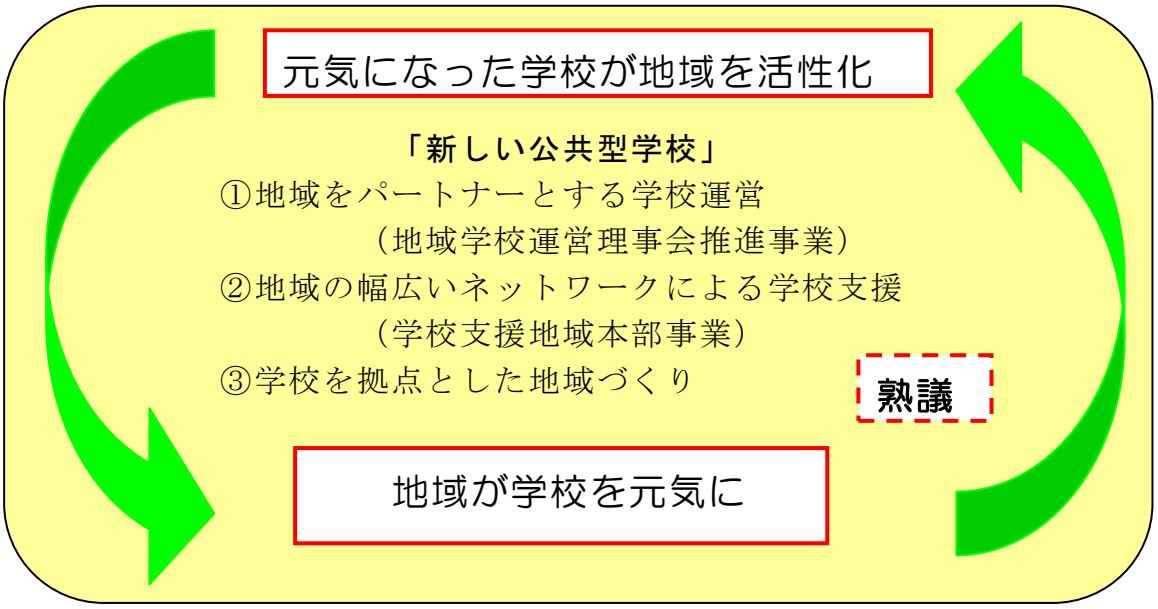
しかし、こうした地域と学校の関係は、どちらかと言えば「地域や保護者の学校支援、学校運営参画」など、地域や保護者から学校への一方方向の取組が主体であった。本来、学校は、子どもの教育を担うだけでなく、地域の文化・スポーツの発信地であり、教職員や子供達の力を集めた学校力は、地域を牽引し、地域づくりに貢献できる力をもった存在あるとの考えから、この「地域をパートナーとする学校運営」「地域の幅広いネットワークによる学校支援」により生まれる「教育力」を、今度は学校が、地域のために生かすことにより、地域の課題の解決を図り、地域の活性化、学校を拠点とした地域づくりを行うのが、「新しい公共型学校」である。

（３）学校と地域の総合的活性化の目指すところ

これまでの学校は、学力や体力、規範意識など様々な課題に対して、地域学校運営理事会やＰＴＡ、学校支援地域本部、放課後子ども教室などで地域が学校を支えるということが主であった。

しかし、これからの学校は、地域に支えられるだけでなく、地域や地域の課題に対して積極的に働き掛けて、地域を活性化させていこうとする「新しい公共型学校」になっていくことが求められている。

つまり、地域が学校を元気にし、元気になった学校が地域を活性化する好循環作りを進めるモデル開発を行うことが、学校と地域の総合的な活性化の目指すところである。

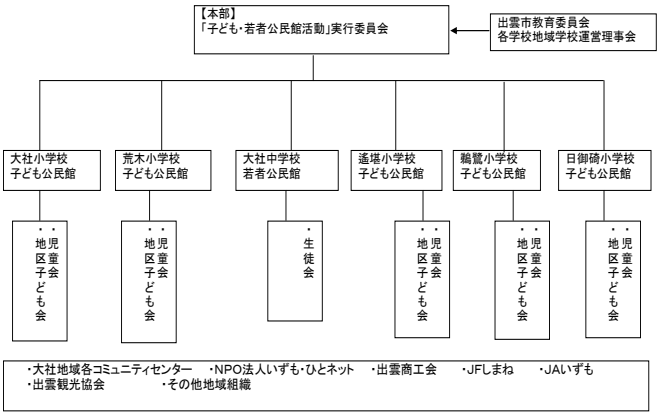


（４）事業主体

「子ども・若者公民館活動」実行委員会

（５）実行委員会の構成

①　大社中学校若者公民館
②　大社小学校子ども公民館
③　荒木小学校子ども公民館
④　遙堪小学校子ども公民館
⑤　鵜鷺小学校子ども公民館
⑥　日御碕小学校子ども公民館
⑦　大社地域各コミュニティセンター
⑧　NPO法人いずも・ひとネット
⑨　出雲商工会
⑩　ＪＦしまね大社支所　　⑪　ＪＡいずも大社地域店
⑫　出雲観光協会　　⑬　その他地域組織



（６）事業計画

①めざす地域
ア）積極的にあいさつを交わす地域
イ）地域の行事に多くの住民が参加する地域
ウ）地域の良さを積極的に発信する地域
エ）地域の活動に関心が高い人が多い地域
オ）地域の魅力にひかれ多くの人が訪れる地域

②実際の活動
ア）子ども・若者公民館の設置
・学校にある児童会・生徒会の組織内に子ども（若者）公民館を開設
イ）コーディネーターの配置
・トータルコーディネーターを本部に１名配置
・各学校に１名の学校コーディネーターを配置
ウ）地域活性化の方途を探るための大社地域や他の地域の歴史、文化、特性・特長等の調査・研究
エ）子ども・若者公民館が提案する地域活性化策の実践
・町づくりへの参画
・あいさつ運動（地域の人へ・観光客へ）
・おもてなし運動（環境美化活動・子どもガイド・案内板設置）
・修学旅行等での地域宣伝
・各公民館キッズガイドマップの作成・配付
・ＨＰの作成（観光スポットやお勧めの場所、子どもからのメッセージ等）
・地域活動への参加と発信
オ）実務者会、コーディネーター会の開催
カ）実践発表会（活動のまとめ）

大社（たいしゃ）中学校若者公民館の実践

Ⅰ　生徒会スローガン

今年度の生徒会は、「５つのエン」を中心に、生徒どうし・学校と地域のつながりを大切にした活動をすすめてきた。生徒会のスローガンは、生徒が常に意識できるよう生徒玄関付近に１年間掲示してある。

「縁」は、人とのつながりや出会いを大切にするエン
「炎」は、イベントや行事に熱中し炎のように燃えるエン
「円」は、クラス・学校・部活動など、心をひとつにつなぎ合わせるエン
「援」は、自分の周りの人を助け応援するエン
「ＥＮ」は、学校生活をエンジョイし、充実した楽しいものにするエン

Ⅱ　昨年度の反省から

昨年の実施した「若者公民館活動」のアンケートでは、生徒や地域からいろいろな意見や感想があった。生徒からは、「自分たちの住んでいる町について関心が持て、大社町民としてボランティア活動など人のためになることをやっていきたい」など、積極的に活動にかかわっていこうとする意見、地域の方からは、「地域や保護者で協力して取り組めることもある。いろいろな情報発信をしてほしい」などの感想があった。

４月になると、生徒会本部が中心になって若者公民館活動を立ち上げ、各委員会でも今までの取り組みを基本にして、活動計画を立てた。

Ⅲ　今年の取り組み

（１）校外でのあいさつ運動

今まで生徒会や部活動を中心に校門や生徒玄関で行っていた「あいさつ運動」を、校外でも行うことにした。生活委員会が中心となり、月初めの交通指導の日に合わせ、学校近くの４ヶ所で交通指導の先生方と一緒に、交通指導と校外でのあいさつ運動を実施した。生活委員と部員で当番を決めて、大社中学校の生徒及び地域の方に挨拶を行った。月１回の活動だったが、地域の方とも元気なあいさつを交わすことができた。

（２）ご縁ネットを使った広報活動

文化委員会では、地域や保護者の方に学校のようすや生徒会の活動について紹介した。１学期は、生徒会本部で「生徒会新聞」をつくって生徒会の活動を紹介した。

２学期からは、文化委員会が「大社ご縁ネット」（有線放送）を使って、体育祭や文化祭の案内や活動のようす、若者公民館活動について地域や保護者の方に伝えた。

（３）校外美化活動（クリーン大作戦）

生徒会の美化委員会を中心に、７月２日（月）に全校奉仕活動（クリーン大作戦）を行った。学年ごとに場所を分担し、学校周辺だけでなく、観光客を迎える「吉兆館」「うらら館」周辺の美化活動を行った。短い時間だったが、駐車場周辺やモニュメントの周辺の除草活動では、軽トラック約２台分の草が取れた。大社中では近年校外での美化活動を行なったことが少なく、生徒の多くは地域に貢献できたという充実感を味わうことができた。

生徒の感想の中にも、「こういった活動を通して地域の人たちに喜んでもらいたい」「最初は面倒に思ったが、作業している内にきれいにしたいという思いが強くなり、一生懸命に取り組んだ」「観光客の人や誰が見てもきれいな町にしていきたい」といったものが多く見られた。

そして、この活動を通して、「大社町では地域の皆さんが、日頃から自分たちの町を自分たちの手できれいにしておられる町である」ということに改めて気づいた。

（４）修学旅行でのＰＲ活動

今年の修学旅行では、京都市内の班別研修や体験学習に加え、地元大社町をＰＲする活動を行った。体験学習では、生徒の希望ごとに「香り袋」「京扇子」「清水焼の絵付け」など４コースで研修を行った。研修終了時のあいさつにあわせ、出雲大社や神話博を紹介するパンフレットを代表の方に手渡し、「出雲大社」の歴史や７月から開かれている「神話博」の内容について説明し、島根の魅力を自分たちの言葉で伝えた。

（５）地区ボランティア活動への参加

大社中学校では、多くの生徒が地区の行事やボランティア活動に参加し、地域の方と一緒になって地域の活動を盛り上げ、貴重な体験をさせてもらっている。これらの活動で、自分たちの力が少しでも地域活動や人の役に立っていることが実感できた。

今年も、「コミセンまつり」や「地区文化祭」などを手伝い、地域の行事を一緒に担うなど、多くの生徒が自主的にボランティアに参加した。

また、親善委員会では、８月２０日（月）に特別養護老人ホーム「いなさ園」を訪問して、窓ふき・車椅子清掃、草取りや床拭きなどの活動に、汗を流した。

（６）「神話博しまね」への参加

昨年７月からの「神話博しまね」では、島根県の内外から７０万人を超える人が大社町を訪れ、島根県の歴史や文化にふれ、大社町のすばらしさを広く全国に発信できた。

大社中学校からも、７月２１日のオープニングに合唱部が参加し、８月１日の「おもてなし劇場」では、３年が「阿国踊り」を元気いっぱいに披露した。

感謝状

しまねのふるさいおもてなし
子ども・若者会議様

貴団体は「神話博しまね」のステージに出演され多くの皆様に大きな感動を与えるとともに会場の賑わい創出に寄与されました。よってここに感謝の意を表します

平成二十四年十一月十二日
神々の国しまね実行委員会
会長　溝口善兵衛

（７）職場体験学習・すくらむ学習・保育実習など

今年も、職場体験学習、すくらむ学習、保育実習など、地域の方々やボタンティアの方に支えられ多くの活動を実施することができた。

地域の方とのふれあいや指導、コミュニケーションを通じて多くのことを学び、地域の一員であることの自覚を育ててきた。

Ⅳ　成果と今後の展望

（１）アンケート結果から

〇地域学校運営理事会

「若者公民館活動」は、地域学校運営理事会や「理事会便り」を通して、お知らせしてあり、活動の内容については理解していただいている。

また、大社地域は以前から、地域の方を講師とした活動や地域を挙げての挨拶運動など継続的に取り組まれており、生徒たちも活動に積極的に取り組み、良い評価を得ている。

そして、理事さん全員から、「この活動は地域と学校の結びつきを強め、地域の活性化につながる」との回答をいただいた。

〇保護者

前年度の反省から広報活動に努めたが、保護者の中には「若者公民館活動」を知らないと答える方が多かった。しかし、「若者公民館」という名称を知らないだけで、「あいさつ運動」や「環境美化活動」、「ボランティア活動」などについては、ほとんどの保護者が知っておられ、有意義な活動として認めてもらっている。

〇生　徒（３年生）

地域への関心が高まり、自分たちが地域の一員であり、地域との交流を通じ、大社地域を良くしていこうという気持ちが育ってきている。

あいさつなども大社地域の伝統であり、これからも進んで地域の方や観光に訪れた人にあいさつをしたいと、ほとんどの生徒が答えている。

改めて自分たちの住む町の良さを見直し、町の歴史や文化に誇りをもち、ほとんどの生徒が「大社町が好き」と答えている。

ボランティア活動に参加したい生徒、地域の方とのふれあいや交流を楽しいと答えた生徒が、８割を超えている。

（２）まとめ

「子ども・若者公民館活動」の指定は、今年度で終了する。予算のカット及びコーディネーターの廃止は、学校にとって痛手である。しかし、これらの活動内容の多くは、以前から生徒会活動・ふるさと学習として取り組んできたものである。これらの活動には、「生きる力」を育てるのに、教科学習だけでは学べない大切な内容が含まれている。学校教育は、多くの場面で地域の方に支えられ見守られて、教育が円滑に営まれている。また、中学生の時期は、社会の在り方や自分の生き方にも目が向けられていく転換期である。

そのため、生徒会や学校行事でも、地域とのつながりや絆を大切にした活動を工夫し、内容をスリム化させ、かたちを変えて継続的に取り組んでいきたい。そして、「地域・大社町に誇りを持ち、学校生活がいきいきと送れる生徒」の育成に努めたい。

大社（たいしゃ）小学校子ども公民館の実践

Ⅰ　地理的な特色

本校は，出雲市の西に位置し，出雲神話と出雲大社のお膝元，歴史と観光の町である大社町杵築地区に立地している。今年度開催された「神話博しまね」、来年度５月に行われる「平成の大遷宮」により，町は活気にあふれている。

地域の教育力の点からも，杵築地区は学校教育への関心が高く，教育活動への惜しみない助力を得ている。平成 19 年度から２年間「コミュニティスクール調査研究校」として，地域の人々と連携した学校の教育活動を展開し、大きな成果を上げた。現在も「きづき学校応援隊」として学校に地域の方々から積極的に支援をいただいている。

Ⅱ　児童等の実態

全校児童 262 名である。児童は、素直で明るく比較的落ち着いた雰囲気があり、決められた仕事は熱心に取り組む。地域の行事に積極的に参加し、進んであいさつをしたり，笑顔で話したりすることができる。

校庭が、芝生で環境に恵まれており、晴れた日には元気よく外で遊ぶ児童が多い。図書室の本が充実しており，休憩時間に進んで読書をする児童の姿も多くみられる。縦割り班活動を取り入れた体育会や縄跳び集会を行い、全校が仲よく活動できる。

しかし、自分で考え進んで行動したり、自分の思いを豊かに表現したりすることはやや苦手という傾向にある。

Ⅲ　具体的な取組の内容

（１）あいさつ運動

アイデア委員会を中心に、正門ほか３か所であいさつ運動をしている。今年度は「朝起きてから寝るまでにあいさつを 100 回しよう」を目標にしている。登校してくる友達へのあいさつはもちろん、学校の前を通って通勤される地域の皆さんにも元気なあいさつをし、地域にもあいさつの輪を広げたいと考え呼びかけている。

（２）おもてなし活動

①古代出雲歴史博物館での生け花活動

本校では、以前から校区にある古代出雲歴史博物館で生け花活動を実施している。児童会の委員会ごとに歴博に行き、地域のボランティアの皆さんと一緒に生けた花は、博物館内に飾られ、観光客の皆さんに見てもらった。「神話博しまね」の開催前にも、希望者で生け花を行った。おもてなしの心をもちながら、心をこめて活動をしている。

②作品展示

古代出雲歴史博物館では、神話・妖怪クラブの児童が考えたオリジナルの神様のイラストを掲示してもらい、来館者に見てもらった。

③交通広場の清掃活動

昨年度から始めた学校の東側にある「交通広場」の清掃活動は、委員会の活動から全校での取組に広がった。全校草取りデーに合わせ、ペア学年での清掃活動をすることになった。第１回目は、６年生が１年生をやさしくリードしながら、一生懸命ゴミ拾いをし、その後草取りを行った。観光客の皆さんや地域の方に気持ちよく使っていただけるように心をこめて活動した。

（３）地域活動への参加と発信

①「神話博しまね」でのステージ発表

７月 21・22 日の２日間、６年生の有志 20 人が「神話博しまね」のオープニングに参加し、ステージに上がって、心をこめておもてなしの言葉を発表した。そして、６年生全員でつくったふるさと大社の魅力を紹介する「しおり」を来場者に配布した。

９月に３年生以上のクラスが「神話博しまね」を見学した際にも、しおりを配った。

②「出雲かがり舞台」での連吟発表

11 月 8 日、出雲大社神楽殿で行われた古事記編纂 1300 年記念行事「出雲かがり舞台」で、５年生が連吟を発表した。この日まで、月に１度のペースで講師による稽古を続けてきた。

厳粛な雰囲気の中で「素兎（しろうさぎ)」の謡いはもちろん、立ち居振る舞いも様になっており、観客の皆さんから大きな拍手をもらった。

③吹奏楽部のステージ発表

今年度も、８月 15 日のご縁祭りや８月 26 日の町民音楽祭など、恒例のステージに立ち、10 月８日の出雲駅伝でも選手を応援する演奏をして、活動を盛り上げた。２月 24 日には、スペシャルコンサートを開き、いつもお世話になっている地域の方に感謝の気持ちをこめて演奏を披露した。

④地域行事での実践発表

１月 23 日に行われた「子ども・若者公民館活動」実践発表会に、アイデア委員会の６年生が本校の実践を発表し、会場に集まった多くの人に発信することができた。また、６年生全員がこの発表会に出かけ、町内の小中学校の発表を聞き、具体的な取組等を知ることができた。

（４）地域ＰＲ活動

①修学旅行でのパンフレット配布

４月 19 日、広島に修学旅行に行った６年生が平和公園で、大社町のパンフレットを観光客に配布し、大社町に来てもらうよう呼びかけた。

②しおりづくり

「神話博しまね」で配布するために、大社の魅力を紹介する「しおり」を６年生が作成した。一人一人がＰＲしたい場所や特産物を選び、分かりやすい紹介文を考えてていねいに書いた。

③杵築紹介マップの作成

アイデア委員会で、校区である杵築地区を紹介するマップ「ようこそ杵築のまちへ!!」を作成した。たくさんある名所、史跡、建物、特産物等の中から、マップに何を入れるのかを決めるのに何度も話し合いをし、手がきのイラスト入りのマップが完成した。できあがったマップを使ってＰＲ活動を続けていきたい。

Ⅳ　成果と今後の展望

（１）よかった点

・本校の子ども公民館活動の取組は、特別なことをするのではなく、アイデア委員会を中心とした児童会活動を発展させる形で行ってきた。その中で、子ども公民館活動を意識しながら活動をしていくことで、これまでの活動の見直し、新たなアイデアの創出につながった点でよかったと感じている。

・今年度は、「神話博しまね」の開催に関連した活動が入り大変なこともあった。しかし、ふるさと大社の魅力を紹介する取組等により、ますますふるさとを愛する気持ちが育ったと確信している。

・児童のアンケート結果から、「地域を元気にする取組を積極的に進めることができた」「もっとおもてなしがしたい」という気持ちが高まっていることが分かった。

・昨年度４年生が取り組んだ「大社ぶどうすごろく」が、大社ぶどうの箱の中に入れられ全国に出荷された。そのうち何件か学校に問い合わせがあったり、児童に手紙が届いたりし、活動の成果を感じることができた。

（２）今後の展望

・アンケート結果から、児童、教職員と保護者、地域の方との間にこの活動への意識の違いが感じられる。保護者、地域の方への発信を続け、理解と協力を得ていく必要がある。

・本校は、５月の「平成の大遷宮」の関連行事で連吟の発表することになっている。地域活動への参加と発信となるよう取り組んでいきたい。

・先に述べたように、特別なことに取り組んでいるのではないので、今後も「あいさつ運動」「地域を教材とした学習活動の推進」「地域への発信」等の活動を継続していきたい。

荒木（あらき）小学校子ども公民館の実践

Ⅰ　地理的な特色

荒木小学校は、出雲大社の表玄関、一畑電車出雲大社前駅から南へ徒歩 10 分のところに位置している。校区は中荒木、北荒木、修理免の３つの地区で構成され、大社町の南部から東部にかけての平地を占めている。近年、農地が減少し宅地が増えている。この地方特有の築地松（クロマツ）も多く見られる。

校区の大半の地域は、北西の強い季節風を受ける砂地乾燥地で、過去に用水不足などで開発が遅れていた。およそ 300 年前、郷土の恩人大梶七兵衛による防風林の植樹成功や高瀬川用水路の完成等の大偉業によって開拓された比較的歴史の浅い土地である。

農家は全世帯の約５分の１で、大部分が兼業農家である。過去は稲作、養蚕中心から養鶏、養豚、酪農、タバコ栽培へ、そして、現在はほとんどがブドウのハウス栽培へと転換し、日本有数のブドウ生産地となっている。

宅地の増加に伴い、世帯数・人口・児童数ともに微増加傾向にある。地域住民は、荒木コミュニティセンターを中心とした活動に積極的に参加するなど年々活性化している。また、教育に対する関心も高く、学校教育に対しても常に熱心な支援や協力が得られている。

面積 7.3ｋｍ　人口 6,079 人（男 2,920 人　女 3,159 人）世帯数 1,955

（平成 25.2.1 現在）

Ⅱ　児童等の実態（課題）

児童数

学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数	67 人	68 人	56 人	65 人	45 人	51 人	352 人

（平成 25 年 1 月 1 日現在）

本校の子どもたちは、明るく素直で、友だちと仲良くできる。学習意欲もあり、課題に積極的に取り組もうとするが、自ら課題を見つけて追求したり自分の考えを人と伝えあったりしていこうとする力は十分についていない。「気づき、考え、工夫する」学習過程を設定し考える場を確保してきたことにより、既習事項を生かしながら自分なりに考えようとする姿がみられるようになってきた。また、人とのかかわりを重視し、互いに学び合う学習集団を目指した取り組みや「読む」「書く」「語る」「聞く」を重視した学習活動を工夫したことにより、自分の思いや考えを持ち、進んで表現しようとする児童が増えてきた。

また、体験活動を重視したり、感動体験を多く持つことのできる場を設定したりすることにより、感性豊かな児童が育ちつつある。

Ⅲ　具体的な取組の内容

（１） おもてなし運動

①　旧大社駅周辺　清掃活動

私たちの住む荒木をきれいにしようと、7 月 2 日「全校クリーン作戦」を行った。

駅舎のほか、駅通りから吉兆館までを縦割りグループにわかれ、ごみ拾いと草取りを行った。

青色パトロール隊の方々に見守られ移動

11 月 30 日には 6 年生が「旧大社駅」の清掃活動を行った。

観光客と積極的にあいさつを交わしたり駅舎の説明をしたりして、交流することもできた。

②　おもてなし展示とチケット作り

7 月 21 日～11 月 11 日に開催された「神話博しまね」の開催にあわせ、「受け継ぎ、伝えたい　ふるさと荒木　大集合！」と題して、私たちの住む荒木を紹介する展示を行った。またオープニングに配布するチケットを作った。

駅舎での展示

「神話博しまね」オープニングでの呼びかけ

・荒木小学校では切符型のしおりを作りました。
・しおりの表は、国の重要文化財にも指定されている旧大社駅舎の紹介です。裏は、残したい荒木の自慢から６つ選び、１枚１つずつ紹介しました。
・駅舎の一角には、これらの自慢を各学年でまとめた物を掲示しています。
・しおりの表には、感想をお願いするスペースも作りました。
・是非お越しいただきメッセージをお願いします。

チケットの半券には全国から訪れた観光客の方々から心あたたまるメッセージを 295 枚もいただきました。

・地元愛に満ち溢れた「おもてなし」をありがとう。
・受け継ぎ、伝えたい気持ちが伝わりました。
・思い出の場所です。変わらず大切に守っていってください。
・はじめての出雲への旅で素敵な経験ができました。
・掃除をしていた６年生さんそれぞれが、近くを通る私たちに元気な声で「こんにちは！」とあいさつをしてくれました。

（２）地域活動への参加と発信

①　地域のまつりへの参加

毎年 7 月に駅舎前広場で行われる「大梶まつり」において、今年も 4 年生が総合的な学習の時間に学んだ「大梶七兵衛」について、歌や紙芝居などを用いて地域のみなさんに向けて発表した。また、音楽部も、日ごろの練習の成果を「大梶まつり」と「恵美須神社まつり」で発表した。

4 年生の発表

音楽部の発表

（３）地域ＰＲ活動

小学校を中心に、荒木のみどころをマップにまとめた。今後、修学旅行先などで配布し荒木のまちをＰＲしていきたい。

Ⅳ　成果と今後の展望

（１）よかった点

児童のアンケートより

・駅舎のＰＲ活動を通し、地域の良さを改めて知ることができた。
・地域のみなさんとたくさんふれあうことができ、前より仲良くなったと思う。
・出会った人に進んであいさつができた。
・「どうやったら観光客の方が来てくれるのか」頭をひねって考えた結果、チケットに「とってもいいところだね」とうれしい言葉をもらって、私たち自身も元気になった。
・自分たちが取り組んできたことを発表する機会があってよかった。また、他の学校がそれぞれの地域に合った活動をしていることがわかり参考になった。

保護者・地域の方・教員アンケートより

・自分たちの住む地域に目を向け、地域の良さを感じる機会になった。活動を通してふるさとを愛する気持ち、宝を受け継いでいく気持ちを育てることができた。
・「おもてなしチケット」の活動では、双方向のコミュニケーションがあり、子どもたちにとっても大きな励みになった。
・自分たちの住んでいる荒木に、親子共々今まで以上に誇りをもつ事ができた。

（２）今後の展望

・これまでの活動を継続するだけでなく、他の学校を参考にし、チケットに寄せられたアイディアに耳を傾け、活動を拡げていきたい。（児童アンケートより）
・2か年の取り組みでは、地域への浸透が不十分で活性化までにつながっていない。継続することに意味があり、これをきっかけとして地域と学校が一体となってひとつひとつ事業を成し遂げ、積み重ねることにより活性につなげたい。
・学校便り、ホームページ等で活動内容を発信してきたが、アンケートの結果から「子ども公民館」としての認知度が保護者の間では低く、「もっと知りたい」との声も寄せられている。ふるさとを愛する気持ちを共有できる活動となるよう発信を継続したい。

遙堪（ようかん）小学校子ども公民館の実践

Ⅰ　地理的な特色

遙堪地区は、出雲大社の東方に位置し、北山山麓から南へ沖積層の耕地が開け、旧菱根干拓地から西南の県立浜山公園へつづく農村地帯であり、稲作を中心に、ぶどう生産も盛んな地域である。

学校の周りには田園が広がっており、また、南側には高浜川が流れており、自然豊かな環境に恵まれている。

地理的な特色を活かしながらダイナミックな体験活動を実施することができる。

Ⅱ　児童等の実態（課題も含めて）

児童は、素直で明るく、協力し合って学校生活をおくっている。全校合唱では、児童全員が澄んだ歌声で、気持ちをこめて歌うことができる。毎年実施している“ようかんっ子フェスタ”（学習発表会）では、表現力を豊かに発揮している。

また、本校では、「ハイタッチあいさつ」の運動をこれまで進めてきており、児童にも定着し、自ら進んであいさつを行うことができるようになり、地域の方にも明るくあいさつを行っている。

さらに、体育会などの集団的な活動の場面では、グループでまとまり、助け合いながら活動を進めることができる。

一方、自分の思いを、友だちなどに伝えることが十分にできなくて困ってしまったり、友だちの思いをしっかりと受け止めることができなかったりするなど、普段は仲の良い友だち関係でありながらも、トラブルが生じることもある。

Ⅲ　具体的な取組の内容

本校において、「子ども公民館」の実践を行うに当たり、**「出雲市大社地域の活性化を目指す『子ども・若者公民館活動』」事業**における期待される成果と、本校がこれまでの取り組んできた教育成果の比較検討を行いながら、重点内容を考えた。

本事業の期待される成果としては、次のような内容が挙げられている。

①　子どもたちが地域の活性化に向けて、地域に働きかけることで、地域の大人たちも、子どもが考えたことを応援し、子どもの姿に地域が動かされるようになることが期待される。
②　地域の連帯感を再び取り戻す。

③　ふるさを愛し、生きがいの創出へつながる。
④　出雲市を支える人材育成を図る。

この中の、①、②、③については、本校がこれまで推進してきた「ふるさと教育」のねらいとリンクすることから、本校では、「ふるさと教育」を核として「子ども公民館」活動を推進することとした。

本校における「子ども公民館活動」の基本的な考え方・体制

○テーマ

「ふるさと”すてきなようかん”再発見！プロジェクト」

～人とのかかわりを大切にし、人・地域から学び、ふるさとようかんを大切にしようとする子を育てる～

○ねらい

歴史と自然の共存する遙堪地域のすばらしさを、調査活動・体験活動をとおして感得し、“ようかん”を大切にしていこうとする心情・態度を養う。

調査活動・体験活動をとおして学んだことをまとめ、多様な表現活動で多くの人に伝えることにより、コミュニケーション能力を高め、自尊感情を育む。

子どもと、地域の方・保護者の方との交流活動（おもてなし・思いやり）をとおして、感謝・感動・生きがいを共有し、地域全体の活性化を図る。

○推進体制（イメージ図）

○校長
○教職員

○教頭（総括）　　**○ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ（連携・支援）**
○５年担任　（指導）

○地域
○コミュニティセンター
○運営理事会

ふるさとＰＲ活動の実施。
・ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
・新聞
・修学旅行での地域ＰＲ活動
・ﾜｲﾅﾘｰでのＰＲ活動
・交流活動

あいさつで人と人との絆を大切にする。
・ﾊｲﾀｯﾁあいさつ

おもてなし活動の展開。
・「神話博しまね」おもてなし活動

ふるさと教育活動を基盤として取り組むこととする。(4.5.6 年生の活動を中心とする)

４年生	5年生	６年生
※遙堪の環境クリーン隊 ※遙堪いいとこ大発見	**※米づくりから学ぼう** **※おもてなし活動**	※探して食べよう春の七草 ※感謝の気持ちを届けよう

【実践例】

（１）あいさつで人と人との絆を大切にする

①ハイタッチあいさつ

児童自ら、積極的にあいさつを行い、あいさつすることの心地よさを体得させるため、本校では、「ハイタッチあいさつ」を推進している。

児童同士、児童と教職員、児童と地域の方との「ハイタッチあいさつ」を行い、お互いに心地よさを体感し、温かい人間関係の醸成を図るようにしている

「ハイタッチあいさつ」を重点的に取り組む場として、次のようなところを考え、取り組んでいる。

ア　集団登下校時（主に、児童同士、児童と地域の方）

イ　学校昇降口前（主に、児童同士、児童と教職員）

②地域あいさつ運動の推進

地域全体にもあいさつを広げようと、有線放送で、地域全体にもあいさつ運動を働きかけている。毎週月曜日に「あいさつしよう日」として実施しており、地域の方も、児童に積極的にあいさつをされている。

③あいさつ運動「P-D-C-A サイクル」の実施

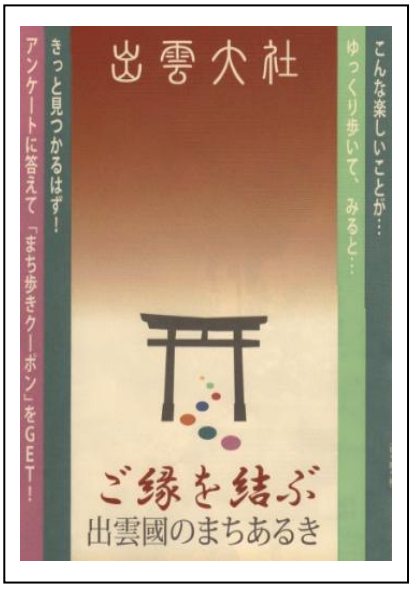
毎週月曜日、本校では集団下校を行っている。全校児童が通学班毎に集まった際、「あいさつ運動」の自己評価、他者評価を実施している。特に、よかった点などについては全校に紹介し、広げていくようにしている。

（２）ふるさとＰＲ活動の実施

①修学旅行での地域ＰＲ活動

平成２４年４月、第６学年が、修学旅行（広島市）で、出雲市が作成したチラシ・リーフレット等を観光客に配布し、出雲大社のＰＲを実践した。

配布している様子



児童は、初めて出会う人たちに積極的にあいさつ、自己紹介などを行った後、「出雲大社」のＰＲを行った。

②マップづくり・ＰＲ活動

第５学年を中心に、ふるさと遙堪の宝物（「ひと・もの・こと」）と出会う活動を展開し、調査した内容などを「マップ」などにまとめ、地域、地域外の方にも「ふるさと遙堪のすばらしさ」を理解していただく活動を展開した。

第５学年児童は、調べた内容をもとに、「何を紹介することが、他地域の人に喜ばれるか」などを視点として、**「すてきな町　遙堪マップ」**を仕上げた。

A面

B面

第２学年児童は、作成したマップを「島根ワイナリー」で配布し、「ふるさと遙堪」のＰＲ活動を展開した。

（３）おもてなし・ＰＲ活動の実施

「神話博しまね」の開催イベントにおいて、観光客の方に、「島根のよさ、出雲大社のよさ、遙堪のよさ」などをＰＲするとともに、積極的にあいさつなどを交わし、交流を深める活動を展開した。

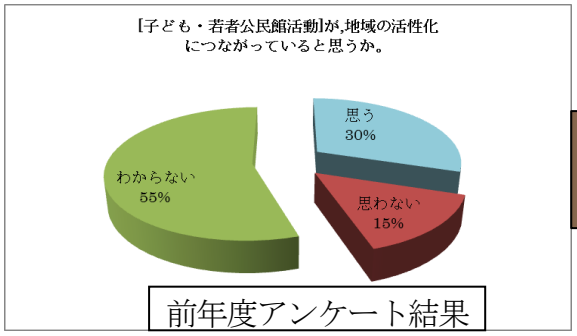
Ⅳ　成果と今後の展望

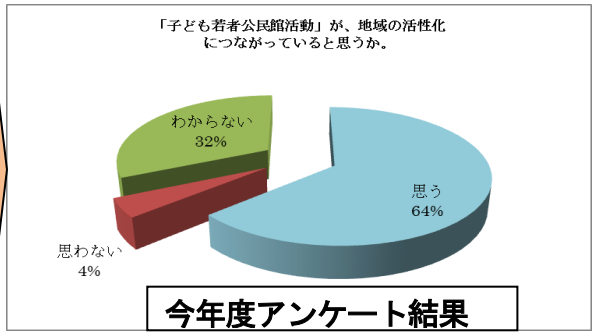
（１）よかった点

①関係者・関係機関との連携強化

地域を核とした教育活動を推進し、教育成果をあげるためには、多くの地域の方の支援が必要である。これまで行った「子ども公民館活動」に対して、多くの方に支援していただいた。地域の方からは、「子どものためだから」「元気がもらえるから」と言っていただいた。子どもたちは達成感とともに、地域とのつながりの大切さを学び取ることができた。

②意識の変容（アンケート結果から）





「子ども・若者公民館活動が、地域の活性化につながっていると思うか」の質問に対して、「つながっていると思う」との回答（教職員及び学校関係者が回答）が、前年度は、３０％であるのに対して、今年度は、６４％まで向上しており、効果があることがわかった。

今後は、重点化して取り組んだ内容を整理・統合し、より効率的・効果的な活動を、地域と連携しながら取り組んでいきたい。

鵜鷺（うさぎ）小学校子ども公民館の実践

Ⅰ　地理的な特色

鵜鷺地域は、鵜峠（うど）地区と鷺浦（さぎうら）地区からなり、北前船の風待ち港や銅・石膏の積み出し港として賑わった歴史を持つ。現在では人口 250 人ほどとなり、過疎化、高齢化、少子化の課題を抱えてはいるが、海・山・川のある美しい自然、歴史ある寺社や古い街並み・伝統芸能など、他所にはない良さが大切に守られている地域である。

地域の人々にとって子どもたちの存在は希望であり、地域全体で子どもたちを育てようとする意識が高い。また、手作りの藻塩販売や古民家カフェ・ギャラリーなどの、独自の資源を生かした地域おこしの機運も高まってきている。

Ⅱ　児童等の実態

全校児童５名（第 2～6 学年、各１名）、完全複式の極小規模校である鵜鷺小学校は、自然・歴史・文化などの地域の豊かな教育環境を生かし、地域と一体となった教育活動を行っている。今年度は、「自分の考えを持ち、豊かに表現できる子どもの育成」を重点目標として教育活動を実践してきた。

児童は純朴で、何事にも一生懸命取り組み、互いに助け合って生活している。人数が少ないため様々な場面で一人一人が中心となることが多く、体験を通しての学びが豊かであると言える。コミュニケーション力向上を図るため、近隣小学校での集合学習・交流学習の場を定期的に設定し、より多くの児童との交流を深めている。

Ⅲ　具体的な取組の内容

（１）　平成 24 年度「子ども公民館活動」の基本的な考え方

①　昨年度末での課題

ア　地域・保護者の「子ども・若者公民館活動」への理解を深めること

イ　他校の児童生徒との交流の機会を設け、児童の経験と視野を広げること

ウ　「神話博しまね」開催にあたり、ふるさとの良さの発見と発信を支援すること

②　本年度の活動基本方針

ア　地域との活動を、「子ども公民館活動」の視点を加えて展開する。

イ　「ふるさと教育」を核にした「子ども公民館活動」の全体計画に従って全校で活動する。

ウ　**『ささえられる』『ふれあう』『ともにする』『つたえる』**という視点を明確にして実施する。

エ　活動構想図（右）を活用し、４つの視点を明記

した年間指導計画をもとに活動する。

オ　活動を意欲的で主体的なものにするために

・呼称を「元気うさぎ活動」とする。

・「元気うさぎ」君（右：児童作成）を活動のシンボルキャラクターとする。

カ　『つたえる』活動（発信）では

・表現力を高める指導の工夫をする。

・ホームページで活動の様子を広域に発信する。

・たよりを発行し活動の様子を地域に紹介する。

・地域を元気づけ、発信する活動を工夫する。

（２）　平成 24 年度「元気うさぎ活動」の実践

① 『ささえられる』の主な活動

・シャギリクラブの指導（通年）

・わかめ生産学習（6/21, 7/12, 9/28）

・藻塩づくり体験活動（9/18, 10/23）

・学習指導への協力(通年)

・交通安全指導、見守り（通年）

・校地美化活動（通年）

② 『ふれあう』の主な活動

・萱巻き作り（6/19）

・老人会とのグラウンドゴルフ大会（7/4）

・老人会との作品作り（11/13）

・保幼小交流・小中交流（通年）

・デイサービス訪問（２、３月）

③ 『ともにする』の主な活動

・集合学習・交流学習（通年）

・郷がえり運動会（9/30）

・郷づくりフェスティバル（11/25）

④ 『つたえる』の主な活動

・あいさつ運動(通年)

・敬老プレゼント渡し（9/11）

・敬老会発表（10/12）

・リーフレットの作製（6～7 月）

・リーフレットの配布活動（7/21, 10/16）

・「郷づくりフェスティバル」での発表（11/25）

・カフェでのおもてなし体験（11/27～30）

・「『子ども・若者公民館活動』実践発表会」での発表（1/23）

Ⅳ　成果と今後の展望

（1）　活動構想の点から　［Ⅲ（１）基本的な考え方②ア～エ］

7/21 から 11/11 まで、大社町で「神話博しまね」が開催されるにあたり、本校では、まず「神話とは」「神話博とは」「おもてなし」等について全児童で話し合った。そして**「自分たちの住んでいるところは、歴史も古く全国に誇れるところなんだ」「出雲に来られた人にいい所だと思ってもらいたいな」「島根や出雲、鵜鷺にもぜひ来てもらいたい」**などの感想や意見が出され、昨年度のようにリーフレットを作り、配ることになった。この話し合いから、以降の活動へとつながっていった。

「元気うさぎ活動」の各指導場面においては、児童の成長を支える場ととらえ、本年度の教育重点目標「表現力の育成」と絡めた目標や内容を吟味し、児童一人一人へのきめ細かな支援に努めた。また、総合単元的な単元構成（たとえば、リーフレットの作成と配布⇒⇒郷づくりフェスティバルでの発表⇒⇒カフェでの接客体験）により、教育効果の高まりが期待できること、および児童一人一人に合った目標設定をすることで、児童が目標をもちやすく、より達成感を味わいやすいことも明らかになった。

教師へのアンケートでは次の記述が見られた。

〇児童への動機づけ意識付けを図るための学習からスタートし、これまで以上に重点教育活動として取り組んできた。その結果、児童の地域や地域の方々を元気にしていくのだという意識はかなり高まっていると感じた。

〇元気うさぎ活動があったからこそ諸々の活動が同じ目標に向かって取り組めた。

〇地域を元気にしよう、自分も表現する力を伸ばそうとする姿勢が見られた。

これらのことから、Ⅲ（１）の活動構想をもとに実践したことで、教育目標・地域の活性化の両面から成果を上げることができたのではないかと考える。

（2）　意欲的･主体的な取組をめざして　［Ⅲ（１）基本的な考え方②オ］

全児童（５名）へのアンケートで、「活動にすすんで参加できたか」という問いには３名が「よくできた」、２名が「できた」と答えた。また、「活動によって地域は元気になっていると思うか」との問いには４名が「とてもなっている」、１名が「なっている」と答えた。

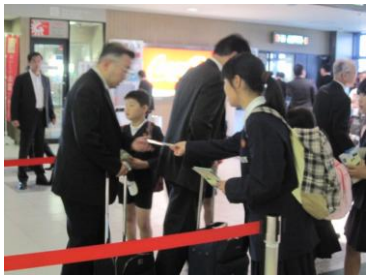
また、高学年児童は、次のように感想を書いている。

「元気うさぎ活動で、高齢者の方との交流や、地域の人の前での発表をしました。敬老の日のプレゼント渡しや、三世代交流作品作りで、いつもよりたくさんお話ができました。郷づくりフェスティバルや郷がえり運動会で、応援パフォーマンスをして、わたしたちが一生けんめいやると地域の人たちが元気になられるし、『発表、すごく良かったよ。』とか言ってもらえるのですごくうれしいです。これからも交流や発表で地域の人を元気にしたいです。」

児童の意欲の支えとなっているのは、言うまでもなく地域の方々の笑顔である。加えて「元気うさぎ活動」という呼称や「元気うさぎ」君の存在も、目的の明確化や楽

しみながら取り組むために有効であったと考える。

（3）『つたえる活動』の充実　［Ⅲ（１）基本的な考え方②カ］



『つたえる活動』の一つとしてリーフレットの作成と配布を行った。児童は鵜鷺のお気に入りの場所を絵で表現し、できたリーフレットを地域や観光客に配布した。

また「郷づくりフェスティバル」では、地域内外のたくさんの人の前で「元気うさぎ活動」で行ったことを、寸劇、スライド発表などで堂々と表現した。

児童は、大好きなふるさとが活気あふれた所であってほしいと願い、そのために自分達にできる活動を精いっぱい行った。次の地域の方の感想にも見られるように、それによって活動への理解も徐々に深まっていった。

〇子どもたちが自分たちのできることをやって地域の方々と触れ合い、喜んでもらえるのは、きっと自分たちもうれしいことなのではと思う。

〇世代を越えた交流によって生まれてくるものもあると思う。すばらしい活動がたくさんあってよいと思う。鵜鷺ならではの活動をこれからも続けてほしい。

〇鵜鷺地区は高齢化していって子どもの数も減少している中で、こうした活動をされると、地域の方々も元気になるのでは。これからも活動よろしくお願いします。

また、神話の学習により児童は、記紀、風土記、神話などに興味をもち、ふるさとの新たな良さに気付いて行った。このこともまた『つたえる活動』の原動力となったと思われる。

さらに、今年度は「町校長会」、「実務者会」、「コーディネーター会」等を推進役として、町内小中学校合同でのマップ作成や「子・若実践発表会」が開催された。

〇鵜鷺はこんな所だよ、こんなことをするんだよ、ということがみんなにたくさん知ってもらえたし、気持ちを込めて表現できました。

〇他の学校も地域を元気にする活動をしているんだなあと思いました。

〇ボランティアをしている学校があっていいなと思いました。

この交流により、互いの地域の良さや学校の取組への理解、今後の活動のヒントへとつなげることができた。

（4）今後の展望

今年度も、さまざまな「元気うさぎ活動」を行ってきた。そして、それぞれの場面において、児童の成長や地域の皆様の笑顔を見ることができた。

〇今年度も充実した取組ができたと思う。これを来年度以降どのように継続させていくかが課題である。（教員アンケートより）

この記述にもあるように、少人数だからこそできる活動を大切にしながらこれまでの活動を継続し、地域と学校とが元気を分かち合える活動に取り組んでいきたい。

また、来年度は出雲大社遷宮の年であり、多くの観光客が出雲を訪れるものと思われる。ふるさとの良さを発見し発信する活動をさらに充実させ、この活動を通してこの地域に育ったことを誇りに思える子どもを地域とともに育てていきたい。

日御碕（ひのみさき）小学校子ども公民館の実践

Ⅰ　地理的な特色

出雲大社から西に約９km、島根半島の西端にあり、地区の大半が海に面している。日御碕神社、東洋一を誇る出雲日御碕灯台、ウミネコの乱舞する経島など名勝や自然の景観に恵まれて、国立公園に指定されている。一部は海中公園にもなり、島根県を代表する観光地である。

以前は漁業が盛んであったが、漁業従事者の高齢化、後継者の減少もあり、近年漁獲量は減少している。

保護者は、学校行事やPTA活動に積極的に参加するなど、教育への関心は高く、また地域住民も勤勉で、学校教育にはきわめて協力的である。

Ⅱ　児童等の実態

日御碕小学校児童数　（H24年度）

１　年	２　年	３　年	４　年	５　年	６　年	計
3	0	4	3	3	4	17名

児童数は近年減少傾向にあるが、地域や、幼稚園、コミセンなどとの連携、児童や保護者への働きかけもし、学習面での個別対応の強化と工夫等、少人数を生かした学習、教育に努めている。今年度９月からは、小学校内に幼稚園も移設し、よりかかわりを持つ機会が増えた。

児童は、豊かな自然と協力的で温かい地域の人々の中で育ち、素直で明るい。ほとんどが幼少期から変わらない人間関係の中で生活してきており、かかわりは深い。落ちついた学習環境は、自分の考えを積極的に伝える力、話し合う力の不足などのマイナス面も生じている。

Ⅲ　具体的な取組の内容

（１）あいさつ運動

今までの町内一斉の取組、学校の取組を拡げていくことで、知らない人であっても出会った地域の方、観光客に積極的にあいさつをする。

（２）おもてなし運動

①プランターにつけるメッセージボード書き

昨年から置いてある灯台周辺の売店、観光案内所のプランターは、地域の人の協力で今年もきれいな花を咲かせている。たくさんの方に見てもらおうと、メッセージボードをあらたに書きかえた。

②神話博のステージで、日御碕について発表し日御碕の魅力を PR

③マップを渡し、日御碕を PR

５・６年生が主となり、地域の方と日御碕の観光地や歴史的ゆかりのある場所を巡り、学習したことをまとめマップを作った。それをいろいろな機会に観光客の方に渡し、PR 活動をした。

「海の学校 2012」灯台周辺でマップ渡し

神話博でマップ渡し

赤来道の駅にマップを置かせてもらう

修学旅行先の広島でマップ渡し

和布刈り神事で大社町マップ渡し

④一人一鉢運動

マリーゴールド、チューリップを一人一鉢育て、きれいに咲いた鉢を地域に飾る。

⑤海岸清掃

宇龍のおわし浜のゴミ拾いをする。（7 月）

宇龍と、日御碕地区のゴミ拾いをする。（3 月）

⑥ミニ門松のプレゼント

出雲日御碕灯台、観光案内所、日御碕の商店、大社町の観光施設に飾る

（吉兆館、電鉄駅、観光案内所、香りプレッセ、古代出雲歴史博物館）

日御碕観光案内所に飾られたミニ門松

（３）ＰＲ活動

おもてなし活動と同じ

（４）地域活動への参加と発信

①コミセンと連携しての行事・交流

◎ぐるっと日御碕めぐり　（わんぱく隊）
◎節句会　（1 年生）
◎新緑をたのしむ会　（1 年生）
◎海の学校 2012　（わんぱく隊）
◎貝の置物つくり　（わんぱく隊）
◎俳句　（5・6 年生）
◎敬老会への参加　（全校）

◎さつまいもを植え、収穫　（わんぱく隊）
◎コミセンまつりでお店屋さん　（わんぱく隊）
◎もちつき大会参加　（1 年生・幼）
◎カローリング　（わんぱく隊）
◎七草がゆ作り　（わんぱく隊）
◎薬膳鍋パーティー　（わんぱく隊）
◎ミニ門松作り・独居老人宅訪問

ミニ門松を作り、一人暮らしの高齢者のお宅を訪問しプレゼントした。日御碕も一人暮らしの高齢者がたくさんいる。普段なかなか子どもたちと会う機会がない方たちへのプレゼントとして子どもたちはミニ門松作りをした。他のコミセンサークルさんのプレゼントも一緒に、民生委員さんも交えて訪問し渡した。

②学校行事や授業の公開

小学生の子どもを持つ家庭以外にもたくさんの地域の方に見てもらえた。

○同和教育研究日御碕地区発表会(11/10)

日御碕地区だけではなく、他地域からたくさんの来校者があり、授業を参観された。

1 年生は、幼稚園と地域の方も一緒にさつまいもパーティーをした。

○いきいき発表会（12/1）　幼稚園、小学校
○弁論大会（2/9）

③幼稚園・ひよこサークルとの交流

年間を通じて、幼稚園とは交流し、活動を続けている。
ひよこサークルとも、わんぱく隊の活動を通して交流している。

④「子ども公民館だより」を発行

子ども公民館で行った活動は、『子ども公民館だより』を作成し、保護者、地域の方に広く発信している。これによって学校での様子や活動の様子を参加

していない保護者、地域の方にも知ってもらえた。

⑤学校ホームページで情報発信

⑥日小だよりを発行

（５）その他

①日御碕の地域を知る

○日御碕探検

日御碕にある施設、史跡めぐり、ホテルふじ見学、浄水場見学、おわし浜生き物観察をした。

地域の方と一緒に日御碕を巡り、歴史の話も含めて教えてもらう。

○海に関する行事

◎全校水泳

◎つり大会

◎学校島で海苔つみ、海苔成形

学校の給食時に１年を通じてその海苔を食べる。

◎宇龍　和布刈り神事の見学

Ⅳ　成果と課題

（１）成果

少人数の良さを生かし、地域と密接に関わりながら活動してきた１年だった。積極的に地域に出かけて、関わりをもったことで、子どもたちも地域の観光施設や歴史、人物に興味を持つようになった。小学生の子どもがいない地域の方とも交流し、子どもたちが地域に出かけて接することで身近に感じてもらえた。そういう方たちの声が学校や子どもたちに届くようになったのもこの活動の成果だと思う。大人主導で子ども発信の活動が少なかったが、子どもたち自身から清掃活動の要望や、もっとマップ配布したいとの声が聞けたのは良かった。

（２）課題と次年度の計画

（課題）

まだまだ大人主導の活動が多く、子どもたちはそれについていく活動が多い。

実際アンケートをとってみると、昨年度よりは認知度もあがり、期待する声も多いが、次年度以降どういう形で継続、発展していけるかがこれからの課題である。

（次年度の計画）　～今年度の活動を継続～

＊あいさつ運動　＊おもてなし活動（清掃活動、花を飾る）　＊ふるさとを知る活動

＊PR 活動（マップ渡し）＊ふれあい活動（地域の方との活動、観光客への働きかけ）

＊情報発信　＊その他（実際に地域に出かけて行き、直接声を聞きながら活動を広げていく）

３．まとめ

平成２４年は、出雲神話が数多く取り上げられている「古事記」が編纂されて 1300 年を迎え、７月２１日からは、大社地域にある古代出雲歴史博物館を主会場に「神話博しまね」が開催された。これにより、古代出雲が誇る銅剣・銅鐸等の弥生青銅器文化と併せ、「神々の国しまね」が全国に発信され、大社地域でもまち歩きをする人の姿も増えつつある。そして、平成２５年５月の出雲大社の大遷宮に向けて県内外の関心も高まり、出雲市を訪れる観光客も増加することが予想される。こうした時期に大社地域の児童生徒も、地域の一員としてこれまで以上に地域の活性化に貢献していくことが大切であるという認識のもと、児童会活動や生徒会活動を核に、小学校には子ども公民館、中学校には若者公民館を設置し、児童生徒が主体的に地域に働きかけたり、地域をＰＲしたりする活動を実施してきた。

平成２３年１０月から取り組み始めたこの「子ども・若者公民館活動」は、これまで学校が行ってきた活動を地域の活性化という点で見直し、特別なことをするのではなく、これまでの活動を発展させる形で取り組んできた。それぞれの学校の実践事例の中にもあったように、「子ども・若者公民館活動」を意識して生徒会スローガンを決めたり、シンボルキャラクターをつくったりと工夫して活動に取り組んできた。

また、「神話博しまね」では、各校がそろってＰＲ活動を進めることもできた。そして、平成 25 年度以降も大社地域をＰＲしていくための子どもたちのアイデアを生かした大社地域マップも作成することができた。

学校間の連携を深めるために大社地域校長会で方向性を検討したり、毎月の実務者会やコーディネーター会で情報交換や具体の活動について話し合い、共通理解を図ったりすることができた。

１月に開催した実践発表会では、各校の子どもたちが、市内の地域学校運営理事会理事や校長、コミュニティセンター関係者の前で堂々と発表し、大社地域で取り組んできた「子ども・若者公民館活動」について出雲市全体に広げることができた。この会に参加したある学校の校長から、『地域は学校を支援し、その逆に、学校は地域の活性化のために地域の活動を支援するという双方向の関係を重視した大社地域の小・中学校の考え方を参考にし、従来本校で行っていた活動を新しい視点で捉え直し取り組んでいきたい。』という感想もあった。

また、日御碕小学校の児童が弁論大会で地域の探検の学習について次のような発表をしている。『この学習を通してたくさん地域の歴史を知ることができました。まだ他にも、僕の知らない大事なこともあるだろうと思います。地域の歴史を知っておくことはとても良いことだと思うし、知っておかなければならないと思います。これからも、日御碕の歴史を調べ、そしてたくさんの人に知ってもらえるように発信していきたいです。』そして、保護者の中には、『親子共々今まで以上に自分たちの住んでいる地域に誇りを持つことができた。』という感想もあり、これも「子ども・若者公民館活動」の成果であるといえる。

児童生徒が頑張っている姿を見せること、頑張っている様子を積極的に地域に発信することにより、地域のさらなる学校支援へとつながるという好循環のサイクルが生まれつつあるように感じている。地域の活性化は一朝一夕にできるものではないが、子どもたちのこの「子ども・若者公民館活動」によって地域の大人の意識もかわり、子どもたちもこの地域活性化の取組を経験することで将来の大社地域を担う大人へと成長してくれるものと考えている。

平成２４年度　出雲市大社地域の活性化を目指す

「子ども・若者公民館活動」

発行・編集　　出雲市教育委員会学校教育課内
「子ども・若者公民館活動」実行委員会
〒693-8531 島根県出雲市今市町 70
TEL　0853－21－6196
発　行　日　　平成 25 年 3 月